

平成 19 年度シャコ伊勢・三河湾系群の資源評価

責任担当水研：中央水産研究所（黒木洋明、堀井豊充）

参画機関：愛知県水産試験場、三重県科学技術振興センター水産研究部

要 約

シャコ伊勢・三河湾系群は、平成 14 年に資源回復計画の対象種に指定され、資源評価調査対象系群に指定された。愛知県における 1970 年以降の漁獲量は 547～2,238 トンの範囲で変動し、3～5 年周期で増減を繰り返している。1990 年までは増減を繰り返しながらも増加傾向にあったが、1991 年から 4 年連続して直線的に減少し、1994 年に 850 トンとなった。1996 年から 3 年間は 1,000 トンを超える漁獲量がみられたが、1999 年以降は再び 1,000 トンを割り込んだ状態が続いており、2005 年、2006 年の漁獲量は 500 トン台の過去最低の水準に落ち込んだ。しかし 2000 年以降は漁獲努力量も減少しており、資源量指標値は下げ止まっていることから、動向は横ばいの状態と判断された。三重県では愛知県に比較して漁獲量は少なく 16 年間の漁獲資料では 10～60 トンの範囲にある。三重県の漁獲量も近年減少しており、1996 年以降は 9～36 トンの低い水準で推移しているが、2004 年以降は若干増加している。

水準：低位 動向：横ばい

1. まえがき

シャコは江戸前の寿司や天ぷらの材料として利用され、東京湾では古くから漁獲されている。その他の地域でも、伊勢・三河湾をはじめ、石狩湾、仙台湾、大阪湾、瀬戸内海各地、博多湾などで漁獲対象資源として、小型底びき網や刺網によって漁獲される。近年、シャコを漁獲している小型底びき網漁業において、漁獲物に占めるシャコの比率が低下していることが指摘され、魚体の小型化も懸念されている。

水産庁では平成 14 年度に伊勢・三河湾小型底びき網漁業対象種について資源回復計画を策定し、シャコ、マアナゴ、トラフグについては 25% 程度の漁獲量増大を目標として資源回復のための措置をとることとなった。これに伴い、資源の動向を的確に把握することを目的に、平成 14 年度から本種は資源評価調査の対象種になった。

2. 生態

(1) 分布・回遊

シャコは我が国各地の沿岸域、黄海、東シナ海に分布し、内湾の水深 10～30m の泥底の海域に多くみられる。シャコ伊勢・三河湾系群（図 1）の主漁場は伊勢湾口から知多半島西岸に形成され、三河湾では知多半島東部の知多湾に形成されている。分布域は漁場より広く、当該海域の泥底にはほぼ全域に生息しているようである（愛知県 1988）。愛知県の小型底びき網漁船の標本船の単位漁獲努力量あたりの漁獲量（CPUE: kg/1 時間曳網）の月別変化の例を図 2 に示した。伊勢湾では主に知多半島西岸の湾奥部から湾口部にかけて分布の中心があり、三重県側

では少ない傾向がある。分布中心は時期により変動し、特に8月には、春期と冬期に分布が多い知多半島西岸では少なくなり、伊勢湾の湾奥部と湾口部および三河湾の知多半島東岸の湾奥部から湾口部にかけて多く分布する。このような8月の傾向は、夏期に発達する底層の貧酸素水塊を避けた分布となっている(伊勢・三河湾貧酸素情報(愛知県水産試験場漁場環境研究部))。大阪湾では、夏期に貧酸素水塊を避けてシャコの一部は移動するものの、留まった多くの個体は死亡するものと考えられている(有山ほか 1997)。

伊勢湾のシャコの浮遊期幼生の2004年の月別分布調査結果(図3)を見ると、幼生は6月から11月に出現し、そのピークは8月から9月で湾南部から湾口部にかけての海域で分布量が多い。2005年以降の調査でのピークは9月以降となったが(図4)、基本的に出現ピークは年1回である。東京湾におけるシャコ幼生の鉛直的な分布中心は、6月から7月にかけては密度躍層下の深い層にあるが、8月以降は貧酸素水塊を避けて密度躍層上の浅い層に移る(中田 1986)。成層構造が発達する夏季には、エスチュアリー循環流により表層では湾外方向の流れが卓越するようになるため、幼生が湾外へ輸送される危険性が高まり、湾内へ着底する個体数が減る可能性が指摘されている(児玉ら 2003)。清水(2000)は、東京湾ではシャコ幼生出現のピークは6~7月と8~9月の2回あるとし、一方、Kodama et al. (2004) は、東京湾の幼生の季節的出現パターンはシャコ資源の高水準期と異なり、最近の低水準期では幼生出現ピークが1回となったことを指摘し、児玉(2004)は、環境変動による生態系の変化が東京湾のシャコ資源に変化を与えた可能性を指摘している。伊勢湾においても、環境等の影響によりシャコ資源量が環境収容力を大きく下回る低水準となっている可能性が指摘されている(中村ほか 投稿中)。

(2) 年齢・成長

シャコはふ化後1ヶ月以上の間に11の異なる幼生ステージを経て着底し、約2年後に体長10cm以上となって漁獲対象となる。図5に小型底びき網に入網した選別前のシャコの体長組成を示した(2006年度愛知県調査)。4~6月では体長6~8cmの小型群と体長9~10cmの大型群の2つの体長群が存在するが、7月以降9月までは小型群の成長した体長8~10cmの単一群が中心となった。10月になると、体長4~5cm程度にモードのある新たな小型群の加入がみられ、それまで漁獲されていた体長10cm前後の大型群とともに、この小型群も入網するようになる。生後3年以上を経たと思われる13~15cm以上の個体はほとんど見られない。伊勢湾における成熟体長は約8cmと報告されている(愛知県 1992)。成長は、東京湾での体長組成解析から推定された例を参考にすると、1歳で体長約8cm、体重約8g、2歳で体長約12cm、体重約26gとなっており、4歳まで生きるとすれば体長約15cm、体重約56gになると考えられている(図6)。なお最近、東京湾のシャコについては、リポフスチン(脳内神経細胞の中に蓄積される色素)を年齢形質として成長を再検討した結果、漁獲サイズに達した個体には様々な年齢群が含まれていて3歳以上の個体の割合が高いことが明らかとなり、従来の体長組成解析から推定された加入年齢よりも高齢の個体が漁獲対象の中心となっている可能性が指摘されている(Kodama et al. 2005)。伊勢・三河湾においても今後検討が必要である。

(3) 成熟・産卵生態

過去の資料によると、産卵期は5月から9月まで続くと考えられており、生殖腺の発達過程から5月と8月の年2回の産卵ピークが存在する可能性が指摘されている(愛知県 1990)。2002

年4月から2007年3月の5年間の生殖腺熟度指数（生殖腺重量÷体重×100）調査（愛知県調査）を見ると（図7）、熟度指数が6.0を超える雌個体の比率（頻度%）は、2002年では5月から増加しはじめ、8月に1回だけのピークが見られたが、2003年、2004年及び2006年では、2～3月から増加しはじめ、5月と8月に顕著な2回のピークがあり、過去の報告と一致していた。しかし2005年では、3月から増加しはじめ、4月と5月に1回だけのピークが認められた。したがって、本系群は基本的には1年に2回の産卵期が推定されるが、年変動があり年1回の場合もある。また、成熟個体の割合は低下傾向にあり（図7）、このような年変化がおこる要因とシャコ資源に与える影響の解明は今後の課題である。

（4）被捕食関係

東京湾では2～3cmの小型個体では魚類を摂餌する比率が高く、4～12cmで貝類の比率が高まり、12cm以上の大型個体では多毛類、甲殻類も摂餌して食性が広くなることが報告されている（中田1989）。また、マダイ、マハゼ、トカゲゴチ、ミミイカ等がシャコを捕食しているが、これらの捕食者が食べていたシャコはかなり小型の個体であった（浜野2005）。また、伊勢・三河湾では、マアナゴが小型のシャコを捕食していることが確認されている。

3. 漁業の状況

（1）漁業の概要

伊勢・三河湾におけるシャコは他海域と同様に小型底びき網による漁獲がほとんどであり、他には刺し網と定置網で若干漁獲されている程度である。伊勢・三河湾の小型底びき網漁業にとってシャコは最も重要な魚種で、かつては同漁業種類の水揚げ金額の20～50%を占めていたが（愛知県1991）、最近ではその割合を減らしており、2000年にはガザミ、マアナゴに次いで水揚げ金額の13%であった（水野2003）。

（2）漁獲量の推移

愛知県における1970年以降の漁獲量は547～2,238トンの範囲で変動し、3～5年周期で増減を繰り返している（図8）。1990年までは増減を繰り返しながらも増加傾向にあったが、1991年から4年連続して直線的に減少し、1994年に850トンとなった。近年では、1996年から3年間1,000トンを超える漁獲量がみられたが、1999年以降は再び1,000トンを割り込み、その後減少が続いている。2005年、2006年の漁獲量はそれぞれ547トン、553トンと落ち込み、1970年以降で最低の水準となった。三重県では愛知県に比較して漁獲量は少なく10年間の漁獲資料（～2003年：三重県調べ、2004～2006年：水産庁調べ）では概ね10～60トンの範囲にある。三重県の漁獲量は、1996年以降は9～36トンの低い水準で推移しているが、2001年以降の漁獲量は増加傾向にある。

愛知県における主要水揚げ港（豊浜）での漁獲量の経月変化をみると（図9）、4～5月にピークがあり、8月以降の漁獲量は少ないが、2003年では10月から再び増加し、11月、12月にまとまった漁獲がみられた。

（3）漁獲努力量

愛知県および三重県の主要水揚げ港を根拠地とする小型機船底びき網漁船のべ出漁隻数を漁

獲努力量とみなし、その経年変化をそれぞれ図 10、図 11 に示した。最近 10 数年で出漁隻数は大きく減少しており、漁獲努力量は相当減少しているものと推測される。平成 14 年度より、漁場位置、努力量、漁獲尾数に関する基礎的な情報を収集するため、小型底びき網を抽出して標本船調査を開始しており、漁獲努力量および CPUE（単位漁獲努力量あたりの漁獲量）の推移を詳細に検討するためには、今後調査を継続してデータを蓄積していく必要がある。

4. 資源の状態

(1) 資源評価方法

愛知県と三重県の漁獲量の経年変化を主体として、資源量指標値の推移、各県の精密測定調査、標本船調査、漁場一斉調査ならびに新規加入量調査（予備調査）の結果をもとに資源状態を判断した。

(2) 資源量指標値の推移

愛知県の主要水揚げ港を根拠地とする小型機船底びき網漁船（伊勢湾で主に操業）によるシャコ CPUE（単位漁獲努力量あたりの漁獲量[kg/隻]）の推移（1989 年～2006 年）を図 12 に示した。1990 年から 1999 年にかけては減少していたが、2000 年以降は漸増傾向にある。

(3) 資源の水準・動向

伊勢・三河湾全体での漁獲量は最低の水準であるが、資源量指標値は 2000 年以降漸増傾向にあることから、資源水準は低位、動向は横ばいと判断した。

5. 資源管理の方策

伊勢・三河湾におけるシャコの漁獲量は減少傾向が継続しており、低位水準から脱却する気配がみられない。この傾向は東京湾において 1990 年台になってから資源構造が変化して不漁期が継続していること（清水 2002）とよく似ている。東京湾のシャコの年級強度は生活史初期における環境要因により主に決定されると考えられており（児玉 2004）、本系群のシャコも環境要因、特に貧酸素水塊の規模拡大の影響による資源の低水準が続いている可能性が指摘されている（中村ほか 投稿中）。環境要因は人為的管理が困難であることから、低水準期の限られた資源を持続的かつ有効に利用する方策が必要である。

シャコ伊勢・三河湾系群は、水産庁の進める資源回復計画の対象種に指定されており、同計画では、2011 年までに伊勢・三河湾小型底びき網の漁獲対象であるトラフグ・マアナゴ・シャコ 3 魚種合計の漁獲量を 25%程度増加させることが目標とされた。この目標を達成するために、底びき網漁業の休漁期を設定するとともに、漁場等の操業実態を勘案しつつ小型個体保護の観点から小型底びき網の適切な網目に関する検討を行い、小型個体の再放流を推進することが具体的措置としてあげられている。また、再放流に伴う生残率の向上を図るため、小型底びき網漁船にシャワー設備を導入し散水を実施することとしている。

本資源評価の結果、シャコ伊勢・三河湾系群の資源は低水準にあり、回復の兆しがみられないことから資源回復のための早急な措置が必要である。伊勢・三河湾の貧酸素水塊の規模は拡大の傾向にあり、貧酸素水塊の拡大時にはシャコの分布域が縮小する結果として漁獲圧が高まり、特に商品サイズに満たない小型のシャコ（1 歳）が多獲され減耗することで加入量が減少

する可能性が指摘されている（中村ほか 投稿中）。したがって貧酸素水塊発生時の漁場利用については十分な注意が必要であり、今後、実態をふまえた漁場利用ルールについても検討していく必要がある。小型シャコの保護について資源回復計画では適切な目合いに関する検討を行っている。伊勢・三河湾の小型底びき網はシャコ以外にも小型エビ類、カレイ類及びマアナゴ等の複数の魚種を対象としていることから、目合いを決定する際には周年一律に規制するのではなく、漁獲物の種組成の季節変化を考慮して柔軟な対応が必要となろう（愛知県、1988、1989、1990、1991、1992）。小型個体の放流は、漁獲サイズの大型化を目指した加入当たりの漁獲量最大化（YPR）を実現するだけではなく、未成熟個体を放流することによって産卵親魚量を確保する意味でも重要である。小型底びき網漁業においてシャコが漁獲された場合、船上での選別の後に小型魚の放流が行われているが、特に夏季に最盛期を迎えるシャコ漁の場合は、炎天下で選別作業が行われ、商品サイズに満たずに放流対象となるシャコは温度と乾燥によって生残率が低くなることから（石井・池田 1999）、漁獲物の選別時にシャワー設備を備えることの重要性が指摘されている。伊勢・三河湾資源回復計画においては小型シャコ再放流時の生残率向上のためシャワー設備の導入が進んでおり、8割以上の漁業者がその効果を認めている（富山・岩崎 2005）。さらに、夏季の小型シャコの再放流時の生残率をさらに向上させる方策として、気温の高い日中の操業を避けて、例えば早朝の時間帯に操業することで生残率が高まることをデータで示し、「夏場の操業時間調整の提案」が行われている（愛知県水産試験場）。

以上の取り組みを着実に実施することが資源回復目標達成のために必要であるが、効果を定量的に評価するために必要な生物学的及び資源学的特性値等のデータが現状では不足している。そのため、平成 14 年度より関係各県によって、生物情報収集調査、標本船調査、漁場一斉調査が行われ、さらに浮遊幼生の発生量や分布に関する予備的な調査が行われているが、今後も調査を継続していくことが望まれる。

6. 引用文献

- 愛知県 (1988) シャコの資源評価手法の開発, 昭和 63 年度愛知県水産試験場業務報告, 147-151.
- 愛知県 (1989) シャコの資源評価手法の開発, 平成元年度愛知県水産試験場業務報告, 156-161.
- 愛知県 (1990) シャコの資源評価手法の開発, 平成 2 年度愛知県水産試験場業務報告, 140-144.
- 愛知県 (1991) シャコの資源評価手法の開発, 平成 3 年度愛知県水産試験場業務報告, 119-120.
- 愛知県 (1992) シャコの資源評価手法の開発, 平成 4 年度愛知県水産試験場業務報告, 121-122.
- 有山啓之・矢持進・佐野雅基 (1997) 大阪湾奥部における大型底生動物の動態について. II. 主要種の個体数分布・体長組成の季節変化. 沿岸海洋研究. 35(1): 83-91.
- 石井 洋・池田文雄 (1999) シャコ選別器の開発ーIIー 投棄シャコの生残率推定, 神水試研報, 4, 5-7.
- 児玉圭太・清水詢道・青木一郎 (2003) 東京湾におけるシャコ加入量の変動要因. 神水研研報, 8: 71-76.
- 児玉圭太 (2004) 東京湾におけるシャコの資源量変動機構に関する研究. 東京大学大学院博士論文.
- Kodama, K., Shimizu, T., Yamakawa, T., Aoki, I. (2004) Reproductive biology of the female Japanese mantis shrimp *Oratosquilla oratoria* (Stomatopoda) in relation to changes in the seasonal pattern of larval occurrence in Tokyo Bay, Japan,. *Fisheries Science*, 70: 734-745.

- Kodama, K., Yamakawa, T., Shimizu, T., Aoki, I. (2005) Age estimation of the wild population of Japanese mantis shrimp *Oratosquilla oratoria* (Crustacea: Stomatopoda) in Tokyo Bay, Japan, using lipofuscin as an age marker. *Fisheries Science*, 71: 141-150.
- 清水詢道 (2000) 東京湾におけるシャコ浮遊幼生の生残率の推定. 神水研研報, 5: 55-60.
- 清水詢道 (2002) 東京湾のシャコ資源について－Ⅰ 東京湾のシャコ資源について. 神水研研報, 7: 1-10.
- 清水詢道 (2004) 東京湾のシャコ資源について－Ⅱ シャコ資源回復への私案. 神水研研報, 9: 1-11.
- 富山実・岩崎員郎 (2005) シャコの生残率向上をめざした伊勢・三河湾の小型底びき網漁船へのシャワー散布装置の導入. 愛知水試研報, 11: 59-65.
- 中田尚宏 (1986) 東京湾におけるシャコ幼生の分布について, 神水試研報, 7, 17-22.
- 中田尚宏 (1989) 東京湾におけるシャコの生物学的特性, 神水試研報, 10, 63-69.
- 中村元彦・藤田弘一・水野正之・沖大樹・黒木洋明 (投稿中) 伊勢・三河湾産シャコの再生産に与える貧酸素水塊の影響. 水産海洋研究.
- 浜野龍夫 (2005) シャコの生物学と資源管理. 日本水産資源保護協会. 東京. 208 pp.
- 水野正之 (2003) 愛知県におけるアナゴ漁業について. 第6回アナゴ漁業資源研究会資料



図1 シャコ伊勢・三河湾系群の分布域

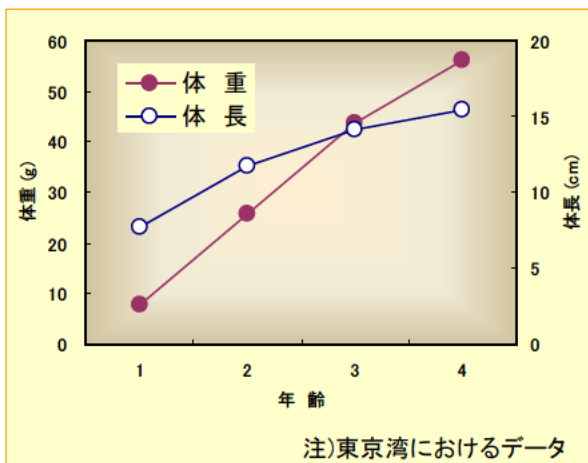


図6 シャコの年齢と成長(東京湾)

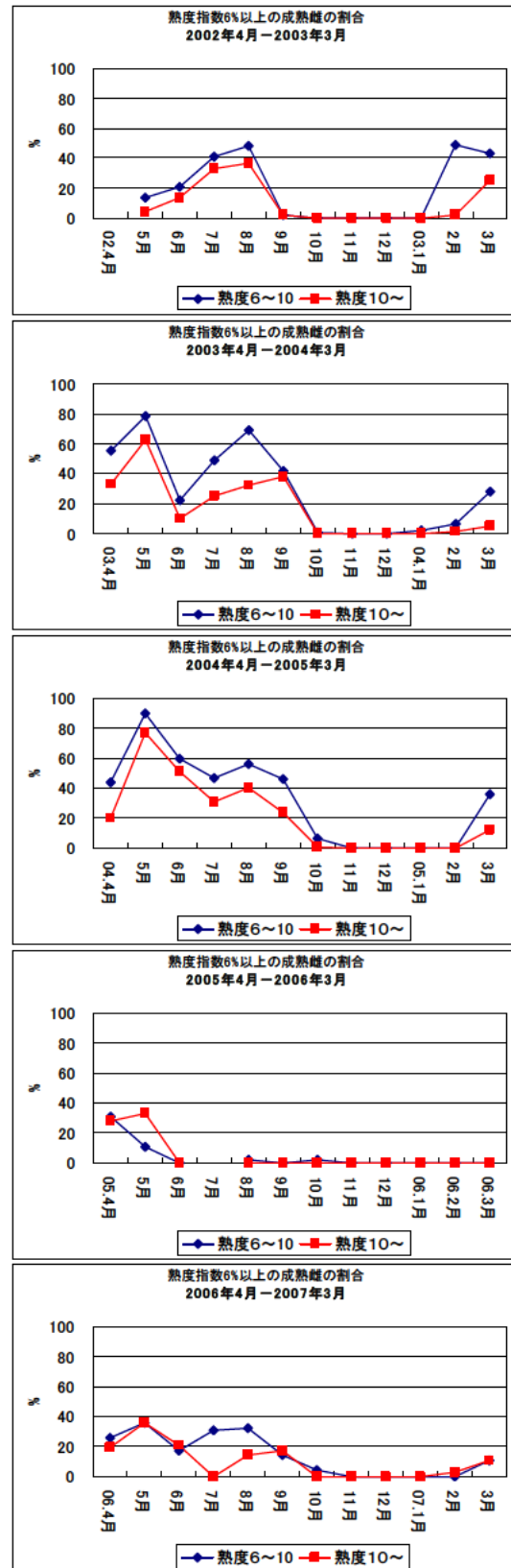


図7 伊勢・三河湾のシャコ成熟雌の比率の月別変化(5年間)

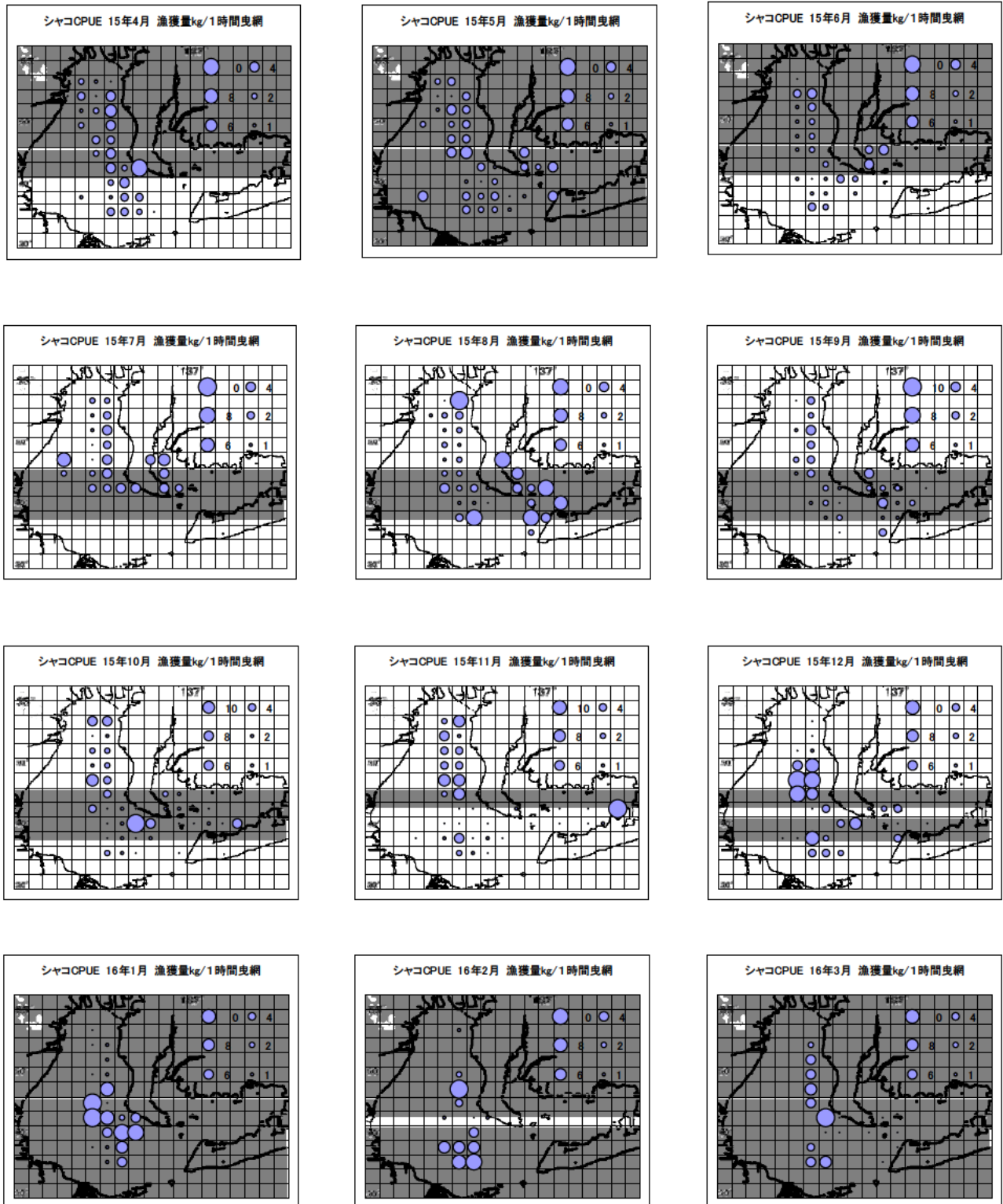


図2 小型底びき標本船のシャコの単位漁獲努力量あたりの漁獲量 (CPUE: kg/hour)

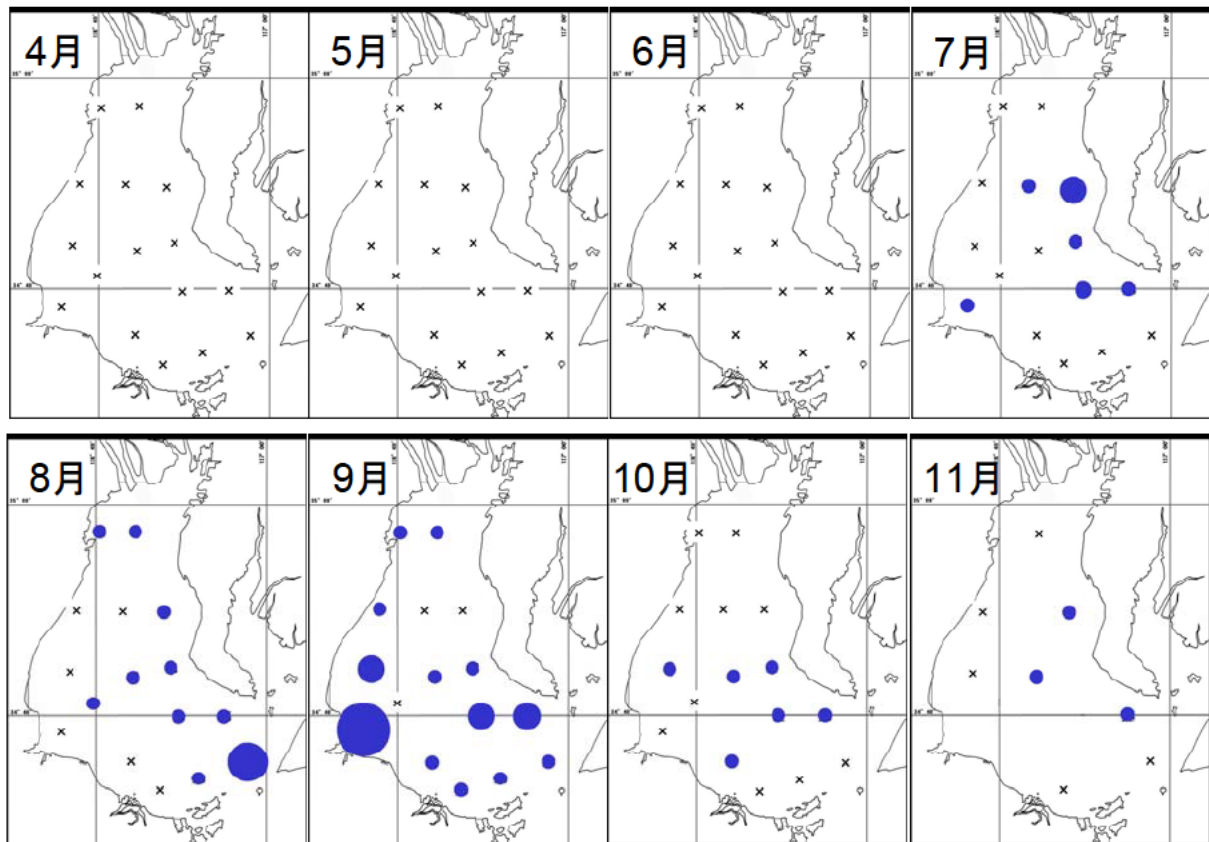


図3 2004年4月～11月の伊勢湾における
シャコ浮遊期幼生の分布(三重県調査)

シャコ幼生の採集個体数

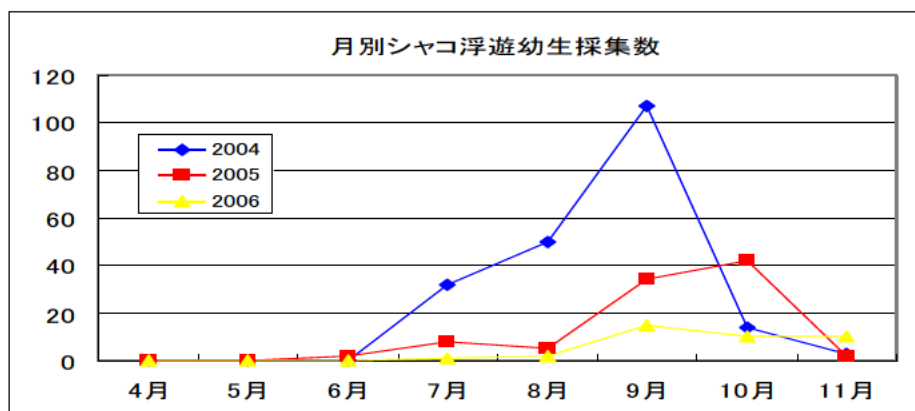
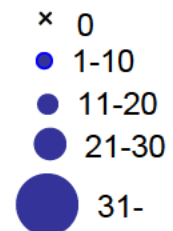


図4 伊勢湾における月別シャコ浮遊幼生採集数
(2004-2006年三重県調査、ノルパックネット鉛直曳き)

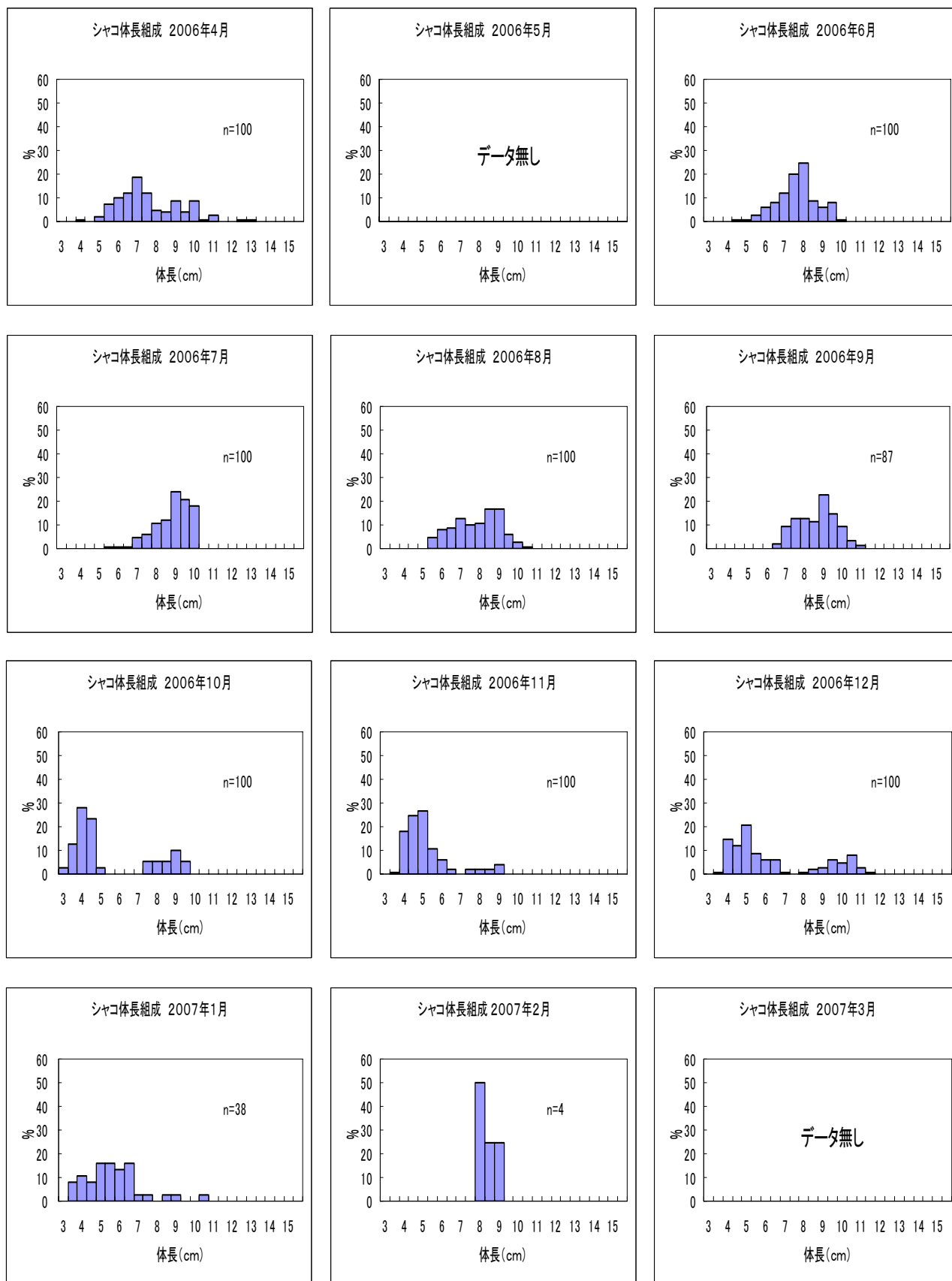


図5 伊勢・三河湾で漁獲されたシャコの月別体長組成(愛知県調査)

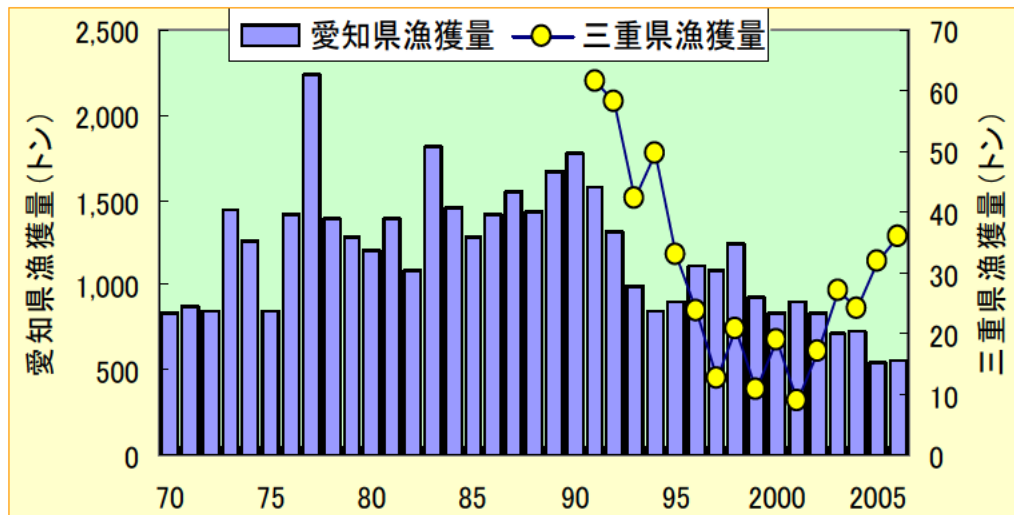


図8 愛知県と三重県における漁獲量の経年変化(2006年は概数値)

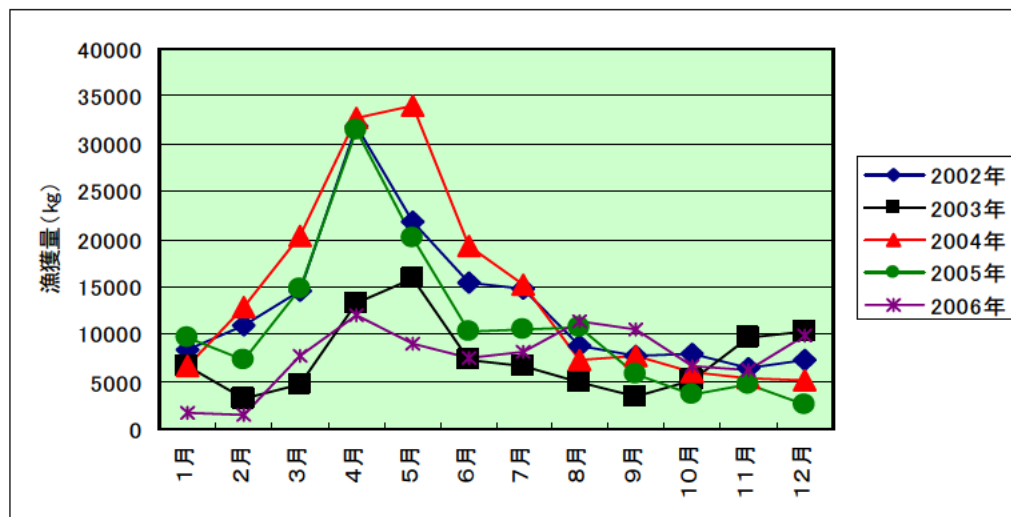


図9 愛知県の主要水揚げ港における月別漁獲量(2002-2006年)

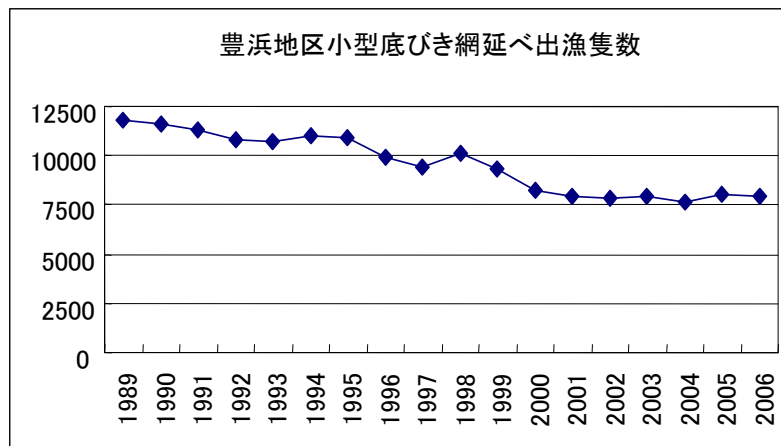


図10 愛知県主要水揚げ港における漁獲努力量の推移
(小型底びき:豊浜地区、延べ出漁隻数で表示)

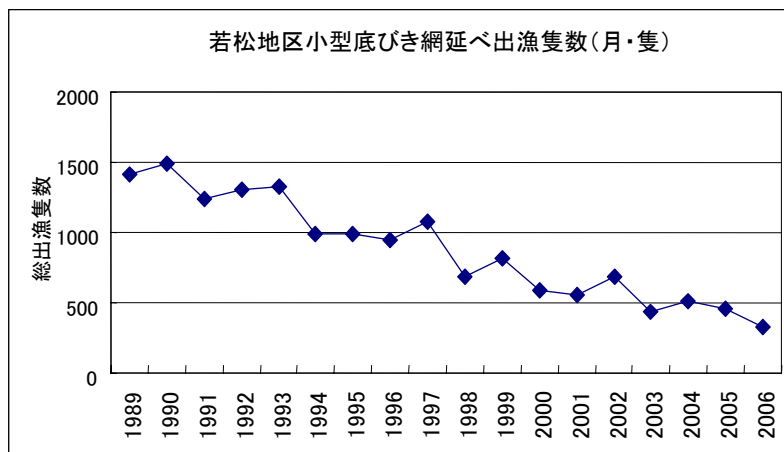


図11 三重県主要水揚げ港における漁獲努力量の推移
(小型底びき:若松地区、延べ出漁隻数(月・隻)で表示)

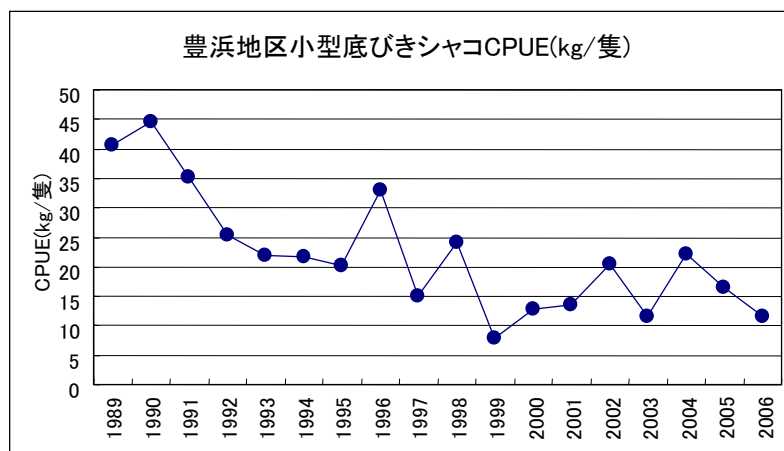


図12 愛知県主要水揚げ港におけるCPUEの推移
(小型底びき:豊浜地区)